



愚問賢答

伊地知文庫
文庫20
296





の道人今からさういふことまで
 て録せらるゝ似て初めは假者たること
 いまも桂林乃一枚と攀りひまも
 小いなるものにて真にれ片玉と
 角とつけ花鳥目とすく古賢れ
 風雅の遺音求ふ所の 爰傾云
 乃遊宴と保てて二十一字れ
 柝本の言葉ととてしめて句
 三つに采乃たれ花陽に優遊
 とけいんひいりお山の月下

のいふことし造次とてま
 道にぬけの輩とわゝるゝ
 二つにすといふこと 僕も
 道より清遠と宴と用時を
 茶海と椀とてさういふ日
 冠とつけ帛とてさういふ
 眠と相奪とて春燕とて若
 同眼の餘教を篇目とてい
 ころ各々乃批判とて為る
 下り 権高人の名と撃とて也

一或る事ありて其の言はくはつるも其の言
存せりしるも二儀ありて其の言はくはつるも
情中一うの言ありて其の言はくはつるも
あらずしむれはあ母を子龍のあらずしむれ
ゆゑあはしき性と今誅するはあはしむれ別の事あり
る百集三行集に精拍ありて其の言はくはつるも
眼前の風景ありて其の言はくはつるも
明れはあはしむれ古語ありて其の言はくはつるも
あらずしむれ軌範とすはあはしむれ
あらずしむれ其の言はくはつるも

わづらき風信とてあはしむれ
難と和奇の道田詩ありて其の言はくはつるも
ゆゑあはしむれ芳歎ありて其の言はくはつるも
誅するはあはしむれ平れ誅是乃踏前とて
すはあはしむれ志乃ゆゑあはしむれ子細ありて其の言はくはつるも
中一うの言ありて其の言はくはつるも
あらずしむれあはしむれや難奇一芳歎ありて其の言はくはつるも
あらずしむれ乃あはしむれ具と信とゆゑあはしむれ天地
とて其の言はくはつるも鬼袖と感とて其の言はくはつるも
あらずしむれ其の言はくはつるも其の言はくはつるも

三代集の艶言とひらくまのびて俗言俗語と云ふ
るさうらえ又さうら治世の音あり乱世の音ありを
聖代乃風俗とてかすし吟者すんまうや
三代集の明時の正雅なむを軌範とするべし
詩三百篇の本朝乃童謡といへば其固の善悪と
風を政とてせり日本記の童謡は書奇とてか
世乃俗亂といふるもやあつて三十一字は詠を素
女鳥尊を素の重臣の朝より起てめはれんむ
はら其詞はまもふし其旨ひらく大義の
よのうもあつては俗めはらるるはさ今うら
そらりたる善物感して蘇きはらるるはら
艶言とのこして政とてはらるるはら
いあるははら乃はら乃賢愚とてはらるるの良
療とてはらるるを正雅の趣とてはらるるの所
とてはらるるの詞とて切瑩とてはらるるの
徳言とてはらるるの言三嘆とてはらるるの詩と
るはらるるはらるるの義理の甚むるはらるる
はらるるはらるるはらるるはらるる

是れははらるるはらるるはらるるはらるる
はらるるはらるるはらるるはらるる

秋蟬吟樹と巻く事のついで善悪業を
弁るうす大道すも仁義たる和奇
乃特ふとて道乃清素也
とて謂ふもあす但大略を推轡の
質よあす和奇はりたる義と特は
まりて後漢博朴の所なりと字を
みるも色見よりまじや 勅札を萬葉
よるにけしより奇合を定平とありあり
道乃好悪とけしめすれ勝劣と奇加
瀛洲の武を先仁乃詔勅と孫姫の武を
聖廟の製信とけしめす病とのうさ
神とてそり難人のこわとてけしめす
めとけしめす正義のなるも
一和奇の内神の時うす事多て代とて俗
ひつてあすも詩漢魏唐各一
体別なりとて三葉三代集以後度々撰集
めりしむ所の廢絶とてけしめす人乃好悪と
一代吟者れ漢のうすの神と西漢
とて模寫するも

漢朝之歌とわりはるる風

うへ借くふりて詩人才子文祚も代り
わくわく我國の天神地祇の清き園乃里
繞りてえんれ道とゆりあふ乃新と大
まなすり事の一人を所れとすの所好り
まふふゆるむせふはあつてあつて
了其旨委古来風神板まふり今乃所れ
れ新と返りて二模亦の清きくくりてを
寛平延喜のいば道中興とくくりる古今集
新貫之つは十感せふくも新撰二百六十
首と撰て古今教二百八十首とのせり今所撰
言之也といふなり向て其後一代とくくり
本板と用くくりての集とくくりて
てくくり字款紀氏新撰云伝金玉三十一人寄
合九品等前後十又篇くくりて
後頼朝長一少哉秀等一忠格八道中細筆鑑念
右相府より進近來秀款再撰并文より後進
古等後端河院秀款大肝とくくりて
次款とくくりて古風よりくくりて
不詳とくくりて爲肝要也

一初の内とくくりて新と撰てくくりて

沈思すべしとて詞とえんまじりたのりいひあはれ
かみはきくはききわとるくしひあはれ
借らして懸念れ起るははしむるも三代集と
かみはきくはききわとるくしひあはれ
のいもふいふたうらあつて大様のゆへにけは
いもふいふたうらあつて大様のゆへにけは
解はしむるも三代集と
やん又風神と字懸言はらふとていもふいふた
り廣字と云ふはしむるも三代集と

吾ら風神と字懸言はらふとていもふいふた

るいもふいふたうらあつて大様のゆへにけは
かみはきくはききわとるくしひあはれ
借らして懸念れ起るははしむるも三代集と
かみはきくはききわとるくしひあはれ
のいもふいふたうらあつて大様のゆへにけは
いもふいふたうらあつて大様のゆへにけは
解はしむるも三代集と
やん又風神と字懸言はらふとていもふいふた
り廣字と云ふはしむるも三代集と

一日本訛れりて其の好美毎葉乃千といふも多
長等しはらふとていもふいふた

尋の事類のいふに世に於ては地を以てして其の地
はくはれしものありては集乃くはらるるもの也
と云ふ今乃代に軌範とすんは九品十幹のと云く
よきなりけるものなりは此の地を以て其の地
上古に多長歎と云ふに人乃地と成す事
深其意切なるものなりて其の字に云ふに
也云くと云ふと中古に東三洛殿拾遺長
歌後頼朝と千載也云うに乃の事なり
尋にわらわらるるものなりて其の事なり
人の教を以てあらざるものなり今云うの中

悉く其の用を以てして其の地を以て
れ地を以て其の地を以て其の地を以て
はくはるるものなりて其の事なり
とは文に云ふに其の地を以て其の地を
地を以て其の地を以て其の地を以て
ものなり其の地を以て其の地を以て
はくはるるものなりて其の事なり
其の地を以て其の地を以て其の地を以て
はくはるるものなりて其の事なり
其の地を以て其の地を以て其の地を以て
はくはるるものなりて其の事なり

一のいふはるむき本勢は返りてあはれ
さして糸よくとく

醍醐大政大臣

らるるのちりたはらふれきるるもましくいふのちりたはらふ

本歌

のそとくはけむし中けのちりたはらふくははらふらるる

一本きりたはらふとてはけむしとてはらふ

はらふらるるはらふもましくいふのちりたはらふ

こころはけむしとて

醍醐大政大臣

まらふもましくいふのちりたはらふくははらふらるる

一本歌「贈春去」のちりたはらふ

のそとくはけむしとてはけむしとてはらふ

こころはけむしとて

はらふもましくいふのちりたはらふくははらふらるる

一本きりたはらふとてはけむしとてはらふ

こころはけむしとて

醍醐大政大臣

らるるのちりたはらふとてはけむしとてはらふ

本歌

まらぬとぬらぬにありて東洋郷はつづける
はらぬとぬらぬにありて東洋郷はつづける
東洋郷はつづける
東洋郷はつづける
東洋郷はつづける
東洋郷はつづける
東洋郷はつづける
東洋郷はつづける
東洋郷はつづける
東洋郷はつづける

一 勢一 句のうへにけりて父とていふは假令信成

定家公家とての信成とてと判りていふ詞信成
也といふ一詞はなるなるかたわていふ用は
文御あつたての南方の判りていふ詞は
とけりていふ一首なりとていふ詞は
とけりていふ一首なりとていふ詞は
とけりていふ一首なりとていふ詞は
とけりていふ一首なりとていふ詞は
とけりていふ一首なりとていふ詞は
とけりていふ一首なりとていふ詞は
とけりていふ一首なりとていふ詞は
とけりていふ一首なりとていふ詞は

川父とていふ一詞は

竹の葉のしるしをさしつけしむるは
しりける優美なる初を好ま^ま末生好む
竹の葉のしるしをさしつけしむるは
戒と通第とありは曹律の物方とあり
むと^本竹のしるしをさしつけしむるは
文意三百の十首入道民部と初と付わたり
んくさしむるはしるしをさしつけしむるは
しるしをさしつけしむるはしるしをさしつけしむるは
るやと外行禁書ありしむるはしるしをさしつけしむるは
んはしるしをさしつけしむるはしるしをさしつけしむるは

一本説とありしむるはしるしをさしつけしむるは
勿論源氏使むるの初より後まで
判詞は後成つれ源氏かゝる号よりんは情事と
くれしむるは源氏乃初と也をさしつけしむるは
かゝる号よりんは源氏乃初と也をさしつけしむるは
号よりんは源氏乃初と也をさしつけしむるは

本説中文詩心物語のしるしをさしつけしむるは
しるしをさしつけしむるはしるしをさしつけしむるは
使むる葉乃原目ありしむるはしるしをさしつけしむるは
初とありしむるはしるしをさしつけしむるは

いふはれはうらみきくや

弄讀二様くる

ふらり絶妙の秀歌

人之三昧入

可い心ゆく人なむ

てん鑑本々わく

と百首及ふ

沸本院中御不忠

殿富門院大補

千首大物

ゆく其れ程拍子

わあ

とあ

い

と

け

へ

い

一

わ

り

天

丹波のうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
わさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
きるひげのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
のうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ
ぬきやうさぎ

一平とはおののこをうさぎとていふは文字すま
まおのこをうさぎとていふは文字すま
ていふは文字すま
うさぎとていふは文字すま
うさぎとていふは文字すま
うさぎとていふは文字すま
うさぎとていふは文字すま

おののこをうさぎとていふは文字すま
おののこをうさぎとていふは文字すま
おののこをうさぎとていふは文字すま
おののこをうさぎとていふは文字すま
おののこをうさぎとていふは文字すま
おののこをうさぎとていふは文字すま
おののこをうさぎとていふは文字すま
おののこをうさぎとていふは文字すま

結題作例事
終日對菊
行案
ついで細くあけし菊の花は乃のらぬをすまを
野の花留者

野の花留者

後頼朝

都くあつてとて蘇子詩破題は例
殿約年合花深し氣色 定家

玉ふらふあつてとて蘇子詩破題は例
日吉歌合紅葉満面 同

句うまらう海もあつてとて蘇子詩破題は例
石大作家一首あつて紅葉 同

うらうらひ芳の花乃都てとの心後のも花とて
西活石大作家し家夜霜 同

羞れとてあつてとて蘇子詩破題は例
然中直い法大作家一首紅葉 同

くまらふあつてとて蘇子詩破題は例
一月の百首花はるあつてとて蘇子詩破題は例

とてとて月乃都てとて蘇子詩破題は例
千見とてあつてとて蘇子詩破題は例

雪月前霞すあつてとて蘇子詩破題は例
い百首入道中々我家八月又長續とて

くまらふあつてとて蘇子詩破題は例
くまらふあつてとて蘇子詩破題は例

くまらふあつてとて蘇子詩破題は例
くまらふあつてとて蘇子詩破題は例

くまらふあつてとて蘇子詩破題は例
くまらふあつてとて蘇子詩破題は例

あはれ川とくそ又とをくころほは
しとくころほくすか

一しすい題は実の字虚の字ありて 能今如彼
月とくころほは虚れとめれすころほは
もや押字の月と月前との左別つやとすころほは
や浦月と海は月とくころほは左前とつころほ
社頭と字押字とくころほは

結題とを改虚実の字とく 野外は外字に
上の上乃さる也如彼の神の字とくし(まき)と
やまは改虚字今も神の字とくし(まき)と

とくころほはくころほはくころほはくころほは

西月

く也まわそ若別とくころほは字の月とくころほは
めるるくす月とくころほはくころほは

海邊と浦とくころほはくころほはくころほは
てまはくころほはくころほはくころほは

くころほはくころほはくころほはくころほは
先神恵とくころほはくころほはくころほは

一社頭とくころほはくころほはくころほは
くころほはくころほはくころほはくころほは

いふことなるはるかにせむ

新記の香くしむ事々の事しう其の
尚香くらんとしむしつる香く
し候し作例

承元二年五月松尾吾合社頭新

定家卿

神子や秋もはつたるを秋はあつた
建保五年又月吾合社頭新

同

今し十羊 つらふ事くはつたるはつたる

一贈答時を ありと奉すはつたるはつたる
つらふ事くはつたるはつたるはつたる
抄すゝありと奉すはつたるはつたる
りふ

贈答時時八雲抄抄のつらふ事くはつたる
小河越行 葉年 ねん景はつたるはつたる
位ありと奉すはつたるはつたるはつたる
春日の幸のつらふ事くはつたるはつたる
一艶言もつたるはつたるはつたるはつたる
長傷弄本つたるはつたるはつたるはつたる

其社は崇教の他社と稱する者判者乃
と云ふ事見及つらん先蹤
のりとも不有り庶幾事ん

抑漢道し始修字し特松里統王の十尊中
の真珠と数ふるなる及人迦道は未
子佛教と謂て俗典と字する事と樂といふ
ことり及のりなるは佛佛のいことま
和方れ廣字と云ふことらては道英宗を
此の事と古集類後と不字と云ふ事と

心の不修と云ふは湖斗慈の日嘯録中
凡光し秋風古し何敬庵外景色不覺
而衆人膏肉積米而煙霞を病疾難似
得にしく助曾以善堂雷勤後仍各法同
端つて是北致る維摩を言説し同
と依有て忘偏に計量し義法付僻也
題維を併答と云ふ事と云ふ
誓と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
いし上流も得入火中流すは清く水

領阿上

貞治第二之唐法改強半一春為隨水自
懶怠不顧後時之傍觀錄一通遺信之音京
松黃門禪門探得頭昭古今自入密勘加斯
道之奧旨号曰頭信密勘今奉短慮之愚
同惠擊教篇之群蒙匪帝達天聽利又
征責大將軍彼之下慢之同博以之答以狗
續韶故銘愚同賢淫而已

五湖釣商

此一巻か一日に、御坊の事は、是後好

不考昔亦亦為史之被。よととと

三月十日

義一

三位殿

貞治二年二月廿日進上二條殿に書向

を清め事三月十日、上院有母君

よとと殿被勘下清書

十卷の事けんくくくくくくくくくくく

あり初探の事しり骨ははくしりあり

...の書きかた

下...の書きかた

...の書きかた

...の書きかた

...の書きかた

...の書きかた

申...の書きかた

...の書きかた

...の書きかた

...の書きかた

...の書きかた

...の書きかた

...の書きかた

...の書きかた

...の書きかた

...の書きかた

...の書きかた

准大臣宗綱

第一册

